

さて常光寺は、菅家見聞集に、寛文三年八月十八日之夜、金澤三社常光寺祭禮に付、人群集、町廻之小將衆追拂之處、寺之後與力士中澤三郎兵衛屋敷へ人多く遁入る。中澤妻女長刀を以て沮之。依之彼妻女并下女を切殺す。後日吟味之處露顯し、本多安房家人庄司權兵衛せがれ、田村助左衛門せがれ兩人共切腹被命。といふ事見えたり。さて常光寺は世々當社別當にて神勤せし處、神佛混淆御廢止に付き、明治二年に復飾して神職と成り、廣岡守人と名乗り、常光寺の寺號は廢止せられたり。

○三社宮後

三社神殿の尻地なる町をば、三社宮のうしろといひ、宮前と同じく、町名に呼べり。元祿六年の士帳にも、三社宮後とありて、元祿以前より町名に呼び來れりと聞ゆ。宮のうしろといふは、宮尻といふことにひとし。

○宮城采女上地町

龜尾記に云ふ。三社宮の後町とて、士家五・六軒あり、此の地は昔宮城采女の居邸なりしゆゑに、宮城采女上地町と唱へしかど、今は知るものなしといへり。

○宮城采女長成傳

慶長十年の利長卿越中富山養老附士帳に、七百石宮木采女と見え、元和二年の士帳に、小姓分千三百石宮木采女千石加祿とありて、寛永四年の士帳には、御傍衆二千三百石宮木采女と見えたり。加州勢大坂軍役覺書に、慶長二十年五月七日鎗衆伴雅樂介・安見右近・野村左馬助・篠原織部・津田勘兵衛・津田源右衛門・西尾隼人・丹羽織部・山田覺右衛門・後藤李左衛門・横山大膳・宮城采女、右於岡山表之鎗云々。とあり。三州志韃毘餘考には、此の時、先鋒に加る物頭暨び使令の爲に出づる諸役者心操ありて、岡山口に於て槍功ある輩は、安見右近・野村左馬助・篠原織部・伴雅樂助・津田和泉・向外記・西尾隼人・宮城采女・山田覺右衛門・後藤李左衛門、以上十一人なり。古記に載せたるものは此の分なり。此の外横山大膳・同式部・篠嶋三藏・中川宮内・加藤石見・玉井市正・岡嶋帶刀左衛門・富田下野・丹羽織部等其の數多し。といへり。按ずるに、元和二年の士帳に、宮城采女千石加祿と見えたるは、元和二年に大坂にての戦功を賞せられて、一倍の加恩を賜はりたるものにて、千三百石の

家祿なりしを、此の時千石加恩ありて二千三百石となりし事、寛永四年の士帳にていぢるし。三州志に、外の人々の小傳は載せられたど、宮城は小傳なし。湯淺進良の足輕組宛行考に、先筒足輕大屋彦太郎由緒書に、高德公越前府中にて、鐵炮之者五十人被召抱知行被下、元和四年一統知行所被召上、切米被下。其節より先筒足輕之名目と成り、村上豊前組と成り、其後宮木采女組と成るとあり。按ずるに、村上豊前は二千石賜はり、足輕頭にて、淺野川小橋の下、今前田主膳居屋敷の地に居住すと、國事昌披問答に見ゆ、三壺記追加に、村上豊前は、利常卿元和三年の頃被召抱、同九年將軍家御上洛の頃云々の事ありて御暇出で、金澤を退去す。とあり。されば、宮城采女を足輕頭に被命、村上豊前の預り居たる組足輕を預けられしは、元和九年か寛永元年の事なるべし。さて此の後金澤町奉行に命ぜられしにや。湯淺祇庸の藩國官職通考に、町奉行は寛永十八年陽廣公入國の砌は、小塚藤右衛門・長瀬五郎右衛門勤之。是金澤町奉行の名目の髓に見えし始なり。其次は宮城采女・奥村源左衛門勤之。其後宮崎藏人命ぜられ、慶安四年

富永勘解由左衛門命ぜらる。とあり。平次按ずるに、宮城氏は慶安の初頃まで勤務ありし事、左の書付にて知られけり。

權現堂町・兩末寺町、其外町並につゞき町を立有之處之儀、本町同然、諸法度以下諸事町奉行より可被申付候事。

慶安二年四月十二日

津田玄蕃頭

葛卷藏人正

横山左衛門尉

長九郎左衛門尉

奥村河内守

宮城采女殿

脇田九兵衛殿

右脇田九兵衛は元祖直賢也。公事場奉行にて町奉行を兼勤せし由、自記に載せたり。今枝直方自記に云ふ。或人の曰く、宮城采女といひし者は、明年の奉公を當年より工夫せし程の者なりしと云々。と載せたり。右傍註に家嚴とあれば、今枝信齋の説話なりし事知られけり。さて、其の後々の事は子孫斷絶せしゆゑ詳かならず。加藤系圖に左の如く